様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　４月　８日現在

機関番号：１５５０１
研究種目：　研究活動スタート支援
研究期間：　2011～2012
課題番号：　23820009
研究課題名（和文）　ヴィクトール・バッシュ研究－ドイツ哲学の受容に努める同時代の思想的環境にてらして
研究課題名（英文）　Study on the Aesthetics of Victor Basch: in comparison with other modern French philosophers who willingly accepted German philosophy in similar manners

研究代表者
村上　龍　(MURAKAMI RYU)
山口大学・人文学部・准教授
研究者番号：　80613885

研究成果の概要（和文）：フランスの美学者ヴィクトール・バッシュ（一八六三－一九四四年）を一つの軸として、一九世紀末から二〇世紀前半にかけてのフランス美学を、近代ドイツ哲学との関係という視角から検証した。またそれに付随して、世紀転換期のヨーロッパで盛り上がりをみせた心霊研究などについて併せて調査することにより、当該時期のフランスの思想的環境をいっそう広い視野から検討した。

研究成果の概要（英文）：I inspected French Aesthetics in the late 19th and early 20th centuries, especially that of Victor Basch (1863-1944), focusing on the relationship with modern German philosophy. In addition, I investigated the ideological atmosphere in France at that time by examining, for example, psychical researches vigorously pursued in Europe at the turn of the century.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：　哲学、美学・美術史
キーワード：美学、美学史、哲学、近現代フランス思想史、独仏関係、バッシュ、ベルクソン、心霊研究

１．研究開始当初の背景

（１）私は本研究課題開始の直前まで、アンリ・ベルクソン（一八五九－一九四一年）という、一九世紀末から二〇世紀前半にかけての時期のフランスを代表する哲学者の美学的な思索にそくして、フランス哲学、美学のドイツ哲学との交流の一断面を明るみにだす研究に従事していたが、そのなかで私は、カントをはじめとするドイツ哲学とのあいだでベルクソンが行った対話が、志向をおなじくするフランスの思想的環境、それも、ベルクソンの思想形成の経緯に鑑みるならば、とりわけ一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけての時期のそれを、ひろく背景とするものであるらしいことに思い至った。

とすれば、ベルクソンと同時代に活躍した、それも、近代ドイツ美学をフランスへ導入、紹介したという点では代表的と言ってよかろう美学者であるバッシュの思索もまた、ベルクソンと同様に、ドイツ哲学、美学をさかんに摂取、血肉化しようとする当該時期の思想的環境を下地としているはずであり、そのうえに置きなおしたときにこそ、従来顧みられることの少なかった彼の美学的思想の射程がはじめて十全に測られるのではないか。そしてそのことがひいては、概して注目のおよぶことが少ない一九世紀末から二〇世紀前半のフランス美学にあらたな光を投げかけることにむすびつくのではないか。

私はそのように考え、本研究課題に取り組むこととした。

（２）また、先行研究等の状況に鑑みたとき、本研究課題は以下の諸点に鑑みて学術的な特色を有しており、そのことによってかならずや研究史上のあらたな貢献をもたらすものと考えられた。

第一に、カントをはじめとするドイツ美学のフランスへの導入にさいしてバッシュが重要な役割を担ったことは知られていても、そのことと彼自身の美学的思想とのあいだの相関については従来注目がおよぶことはなかった。しかも、このように隣国との関係に顧慮しつつなされる歴史研究が手薄であることは、バッシュにかぎらず、一九世紀末から二〇世紀前半にかけての時期のフランス美学全般についてあてはまり、当該時期のフランス美学にかんする研究の遅れの原因ならびに結果になっているとみられた。

第二に、バッシュの美学的思想をひろく同時代のフランス哲学の動向にてらして検討する試みも、管見のかぎり見あたらなかった。しかもこのことは、バッシュにかぎらず、一九世紀末から二〇世紀前半にかけての時期のフランス美学全般についてあてはまり、当該時期のフランス美学にかんする研究の遅れの原因ならびに結果になっているとみられた。

（３）さらに、本研究課題は、以下のような近年の国内外の研究動向に掉さすものであるとも考えられた。

従来、近代フランス哲学、美学にかんする国内外の研究といえば、複数のフランス人哲学者、美学者が通時的、共時的に共有する思想内容上の傾向に着目し、折衷主義、フランス・スピリチュアリスム、新批判主義、反省哲学、実証主義等々と名づけられるさまざまな思想的系譜をたどることが主流であったが、そのさい視野がフランス国内に留まりがちなきらいがあった。これにたいして近年、ドイツをはじめとした隣国の哲学者との関係に顧慮しながら、近代フランス哲学の形成されるダイナミズムを解明しようとする研究動向が、いわゆる「哲学の国籍」の問題をもまきこんで国内外で盛んになりつつあった。

２．研究の目的

本研究課題の目的は、バッシュがカントをはじめとする近代ドイツ哲学、美学をどのように受容し、そのうえでいかにして自身の思想を育てたのかを、ひろく同時代のフランスの思想的環境にみとめられるドイツ哲学、美学の受容の努力をふまえつつあらためて検討することによって、バッシュの思想を立体的に把握しなおし、もって従来顧みられることの少なかった彼の美学的思想に、そしてひいては、現在でも研究が進んでいるとは言いがたい一九世紀末から二〇世紀前半にかけての時期のフランス美学に、あらたな光を投げかけるとともに、いまだ解明されざる部分の多い近代哲学、美学上の独仏関係の一端を明らかにすることであった。

３．研究の方法

（１）上記の目的を達成するうえで有効な方法であると私が考えたのは、バッシュ、ならびに、カントをはじめとする近代ドイツ哲学の受容をへて思索をふかめたとみられる同時代のフランスの哲学者たち、すなわち、シャルル・ルヌーヴィエ（一八一五‐一九〇三年)、ジュール・ラシュリエ（一八三二‐一九一八年)、エミール・ブートルー（一八四五‐一九二一年)、オクターヴ・アムラン（一八五六‐一九〇七年)、ベルクソン、レオン・ブランシュヴィック（一八六九‐一九四四年）らの著作のテクスト内在的な分析をつうじ、まずは彼らの術語体系を把握したうえで、講義の記録等の二次的資料なども積極的に活用して、ドイツ哲学、美学への言及を丹念にひろいながら、彼らの解釈するかぎりでのドイツ哲学、美学が彼ら自身の術語体系の編成、再編成におよぼした影響を見さだめること、そして、そのありようを相互に比較検討することであった。

（２）なおそのさい、上で名前をあげた面々

と直接的、間接的に交流のあった同時代のフランス人哲学者、美学者による近代ドイツ哲学、美学の解釈にも適宜目を配った。たとえば、フランスにおいて本格的なフィヒテ研究のさきがけをなした哲学史家グザヴィエ・レオン（一八六八‐一九三五）の一連の著作などを参照することは、研究を進めるうえでたいへん有益であった。

（３）また、一九二〇年代においてはやくもカント哲学のフランスへの流入について考察したヴァロワの貴重な仕事や、あるいは個々の哲学者、美学者にかんする近年のいくつかの研究なども、本研究にとって有力な補助線となった。

（４）そしてさいごに、バッシュと同時代に活躍した他のフランス人美学者の思想や、ドイツにおける新カント派の展開などにまで視野をひろげることも、研究にさらなる奥行きをもたらすうえで益するところが大きかった。

４．研究成果

（１）二年間の研究期間中に、途中パリへの出張などもはさみつつ、関連資料の収集、調査はおおむね当初の予定どおりこれを進めることができた。

具体的には、カントをはじめとするドイツ近代哲学、美学をバッシュがどのように受容し、そのうえでいかにして自身の思想を育てたのかを、同時代のフランスの思想的環境にみとめられるドイツ哲学、美学の受容の努力をふまえつつ、検討することができた。

そしてそのことによって、上述のように現在でも国内外で研究が進んでいるとは言いがたいバッシュの美学的思想、そしてひいては一九世紀末から二〇世紀前半にかけての時期のフランス美学の実態を、解明することに一定の貢献をなしえたものと確信する。

（２）のみならず、世紀転換期のヨーロッパで盛り上がりをみせた心霊研究について併せて調査するなど、当該時期のフランスの思想的環境をいっそう広い視野から検討しえたという点では、当初の見込みを上回る成果を研究期間中におさめたと言える。

（３）研究成果の公表にかんしても、著作、雑誌論文、学会発表等のかたちで、あげられた成果の一部を研究期間中に公表することができた。

研究期間中にはバッシュに直接かかわる成果を公表することができなかったが（このことには次年度以降早急に取り組みたい）、当該時期のフランス美学にかんする調査の成果、ならびに当該時期のフランスの思想的環境にかんするいっそう広い視野からの調査の成果については、下に記す著作、論文、学会発表等によってこれを公にした。

（４）本研究課題において調査の対象となったフランス人美学者、哲学者たちが活躍したのは、言うまでもなく独仏関係が政治的、社会的にきわめてデリケートだった時期でもある。そこで今後の展望としては、本研究課題をつうじ得られた成果をふまえたうえで、政治的、社会的な問題との交差にも配慮しつつ、ひき続き近代哲学、美学上の独仏関係を注視する方向で研究を継続、発展させてゆくことが望ましかろうと考える。

とすれば本研究課題は、一定時期の哲学、美学上の独仏関係にそくして美と政治との関係という普遍的な問題を考察する、そのようにいっそう原理的な研究へと発展しゆく可能性をひめていると言えよう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 村上龍、「ヨーロッパ的理性はいかにして越境するか――世紀転換期の「心霊現象研究」の事例にそくして――」、『国士舘哲学』、１６号、２０１２年、３８‐４６頁、査読無。

② 村上龍、「「感性」をめぐるベルクソンの思想とその成立の経緯――一なるものと多なるものとの関係を軸に――」、『美学』、６３巻１号（２４０号）、２０１２年、２５‐３６頁、査読有。

③ 村上龍、「なぜベルクソンは心霊研究に関心をよせたのか――哲学上の方法論の観点から――」、『山口大学哲学研究』、２０巻、２０１３年、２７‐３９頁、査読無。

〔学会発表〕（計２件）

① 村上龍、「ヨーロッパ的理性はいかにして越境するか――世紀転換期の「心霊現象研究」の事例にそくして――」、国士舘大学哲学会シンポジウム「ヨーロッパ的理性の境界へ」、２０１１年１２月１７日、

国士舘大学（東京都世田谷区）。

② 村上龍、「「感性」をめぐるベルクソンの思想とその成立の経緯――一なるものと多なるものとの関係を軸に――」、美学会全国大会、２０１１年１０月１７日、仙台国際センター（宮城県仙台市）。

〔図書〕（計１件）

① 村上龍、コンテンツワークス、『「感性」をめぐるベルクソンの思想とその成立の経緯についての研究――一なるものと多なるものとの関係を軸に――』、２０１１年、総１７０頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

村上　龍（MURAKAMI RYU）

山口大学・人文学部・准教授

研究者番号：８０６１３３８５

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：